

繪本通俗三國志

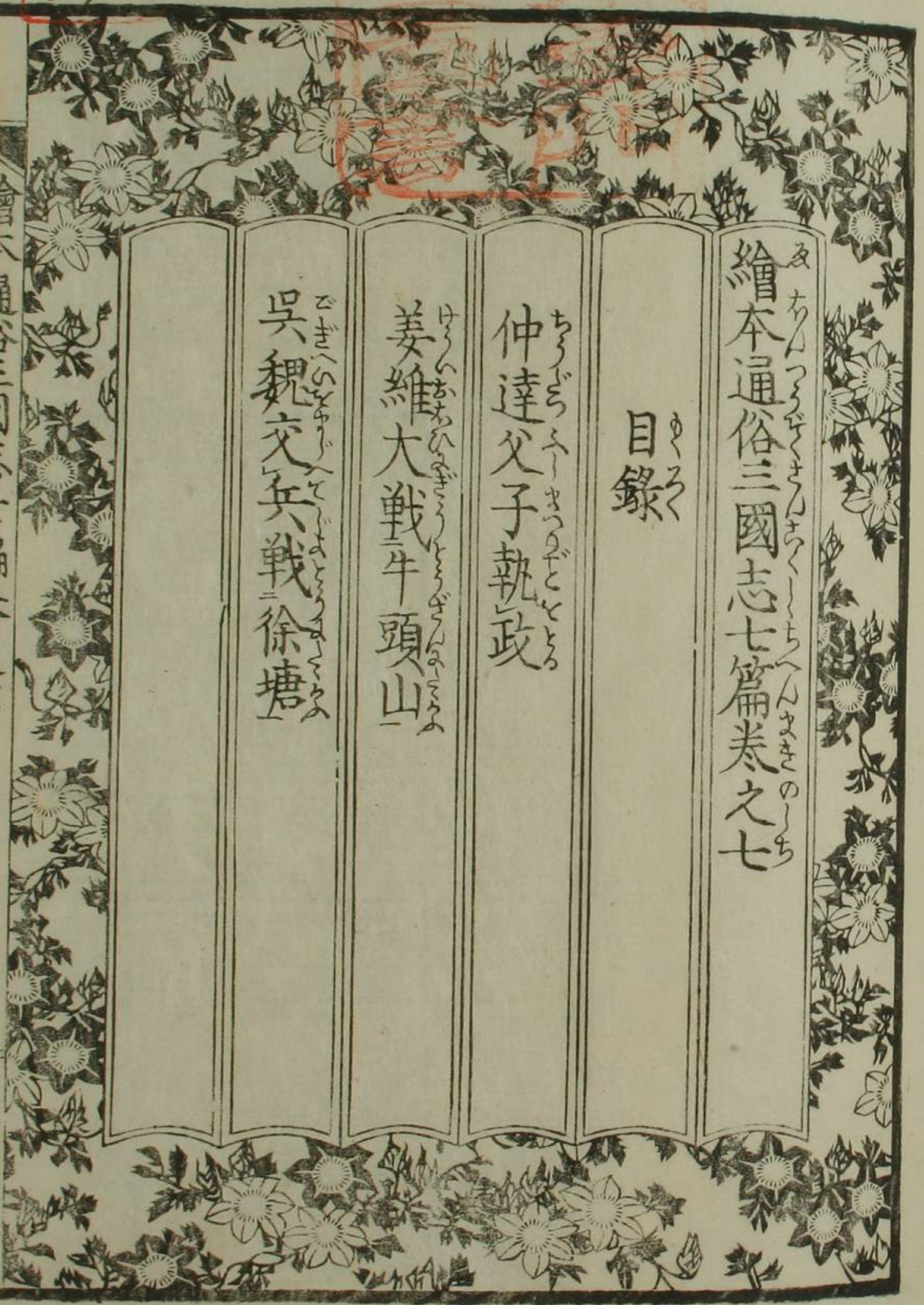
七編

七

21
221
67

六
221
67

東京
學校



繪本通俗三國志七篇卷之七

目錄

仲達父子執政

姜維大戰牛頭山

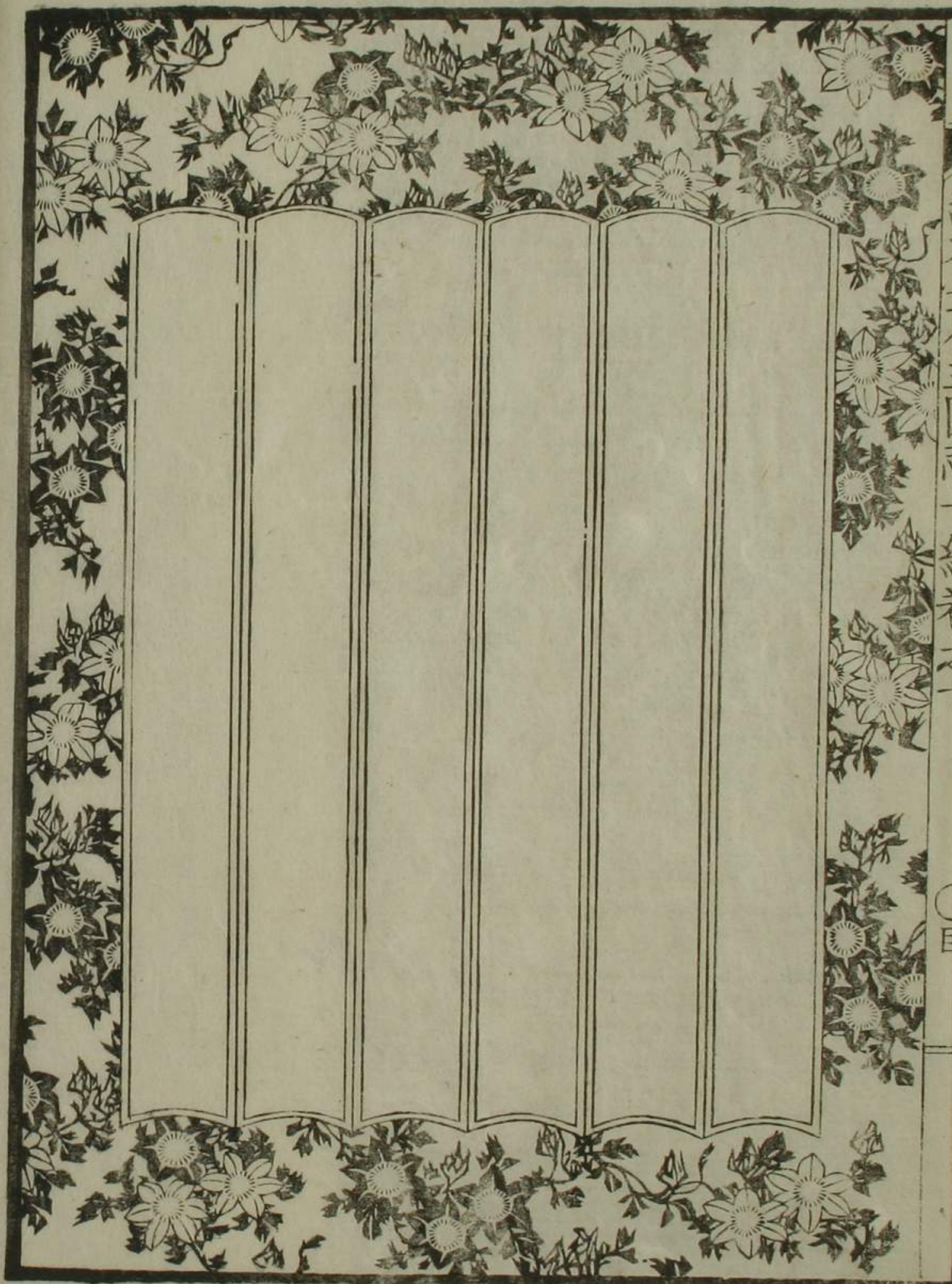
吳魏交兵戰徐塘

繪本通俗三國志七篇卷之七

繪本通俗三國志七編卷之七

仲達父子執政

曹爽とて司馬懿が病の重きと聞て、内をあらがひ喜び、
魏主曹芳を請じ、高平の陵より父曹叡を祭て後直
に野外より出く獵をあら、大小の百官尽く相從ひ、曹爽も三
人の弟と、御林の軍馬ととも、何晏鄧賜も一齊に打出
ければ、司農桓範いそぎ曹爽を馬と扣へて、諫めてやける。將
軍は五万幾典禁の兵馬と統く、何故に兄弟尽く城を去
りぞ。野心のものありて、内より城門を鎖し、あべ如何
して回らん。急ぎ曹爽、鞭をあげて叱りて曰く、兵權皆我
にあり。誰うさやうの企をなさんとて。卒に馬を早て尽打



繪本通俗三國志七編卷之七

出たり。司馬懿の体を伺ひて。大に喜び旧將とよ福を
集ぐ。まゝ軍馬をととの先司徒高柔の節鉞を假て大
將軍の事と司り。曹爽が營を據り。司馬懿みづから宮中
軍の事を行く。曹義が營を據り。司馬懿みづから宮中
入る。郭太后を見へ。曹爽みだり。先帝皇子を託するの重
て忘る。奸雄として國を乱る。廢せざるべし。今この
兵を起し。いふ云ければ。郭太后大に怒りて曰く。天子
いふ外。又生れり。卿あるを如何せん。司馬懿が曰く。臣已
に計あり。御心と苦し。わがとらふ太后震へ。怖れて制
する。能はざる。計へと云ければ。司馬懿が曰く。今日
國賊を誅する。天下の幸甚なり。とて太尉蔣濟尚

書令司馬孚。二人を表を書せて。黃門官を使ひ。城外
又出て。天子を奏せし。司馬懿みづから武具を貯へ。庫
庫を行く。合戦の備をなさんと。或人の由を聞て。曹
爽が家へ告げ。曹爽が妻の劉氏もとより。心早者あり。
又自ら廳前へ走り。止番の兵をわけて。今主公外へ出
る。仲達。又合戦の用意をなさ。何事ぞ能く。まゝ定
よ。と云ければ。大將潘奉といふもの。兼なり。いと精兵
數十騎を引く。矢倉へ登り。四方の体を望見する。司馬
懿兵を引く。武庫へ到らんと。潘奉大に怒りて。されば
大に徒事をあら。とて指詰り。詰さんぐ。射る。司馬懿
射たられて。通下をほむ。時。孫禰といふ大將。いそぎ矢



曹爽
籠居
弾弓を
かへあそぶ

繪本通合二國志七編卷八二



曹爽

繪本通合二國志七編卷八二

倉より上りて藩軍を制し。漫矢を放ちり。是は天下
の事なり。我亦その故をあらばと云けり。藩軍は依
て射さうけり。須臾ありて。司馬昭大勢をてせ来り。父
を守護して。武庫より守ければ。司馬懿及び洛河
陣を取水の上より浮橋を造て守ける。曹爽が手下より司馬魯
芝といふものあり。城中の変をえて。泰軍辛敞と議して。け
る。今仲達此のどく乱をあら。主公出く外あり。如何せん
と。あひひる。辛敞が曰く。手下の勢を引く。城を生天子を
守護して。兎も角もあらん。曹芝の義は同しければ。辛
敞は。後堂に入て。母を見ゆ。その姐辛憲英が曰く。何ゆへ
あいて。尋ぐ。辛敞が曰く。天子外に出ゆ。仲達より

兵を起して。城門を開かれ。天と奪のふて。ゆへ辛憲
英が曰く。仲達へ天と奪のふ。あらば。必ず曹將軍を殺
す。計あらん。辛敞が曰く。此事いまだその実をたづね
辛憲英が曰く。曹將軍へ仲達の敵手はあらば。必ず敗
る。辛敞が曰く。只今曹芝きたなり。某と共に城外
に出ん。如何し。宜しうなき。辛憲英が曰く。事あ
ると。他人ども互に救ふ。況やわれ。汝が君の大事なり。
今城を出く力と扶け。辛敞をあら。曹芝と打つ。
叔十騎を率いて。門を守る。やのて斬ち。城外に馳出
り。司馬懿をあら。て。司馬懿桓範が出ん。とて。拍れ急。使
遣し。招く。む。此に桓範は。その子と打より。城中の

変と議さるゝ其子答てやけるへ。今天子外に在る此や
ゐて居る。不如南門より走るべし。桓範げゝもて馬
に打乗平昌門より出るとすれ城門をでゝ閉て人を
通さず門を守る大將はもと桓範が下吏であらう。司蕃
といふものへければ桓範袖の内より竹版を取出され
郭太后の詔あり。早く門を開けと云ければ司蕃が曰
我うぐへ通さず能く真の詔あらば委く見せての
ち通る。桓範怒りてやけるへ汝は元來もとて從へ下吏
あり。今もとて無礼なる。司蕃是非なく門を開きけ
れば桓範の走り出て曰く仲達は天下を奪ふと汝
を我に從ひ来れ是れ又太后の詔ありと詐なり。司蕃

さて此人は出に拔きたりとして馬を飛して追蒐しう及
ばざりて空しく回る。司馬懿はもとて大なる智囊
洩たり。如何せんと言けし。蔣済が曰く。曹爽は馬の
棧豆を恋ぎ。必く桓範が言を用や。司馬懿げゝ
もとて急ぎ許允陳泰二人をよびせ。御辺城を出て曹
爽をあい。今もとホがんと。曹爽兄弟が兵権を削る為
あり。別々他事ありとして。彼らも安らうと。やと。いひけ
れば二人計を受て出にけり。司馬懿又拔封尹大目を呼で。
蔣済が昏間を渡り。御辺へもとより曹爽と交深し。急ぎ
あの昏間を持て。曹爽を曉し。我心へ只兵権を削る為に
別々害心をき由といひて。無事と城中に回らうと。我と蔣済

と洛水を指て。誓言をあたふとや。ゆゑとて。門をひらいて出けり。ま
のとれ曹爽へ野外に出く鷹を飛。大を走しむるを。ち
まら早馬きたり。城中に變あり。太傅表を上りて。よづり
けれ。曹爽大などろひて。已に馬より落んと。以黄門官いそ
ぎ跪ひて表を上りけり。けり。近臣あてて。読みその文。曰く。

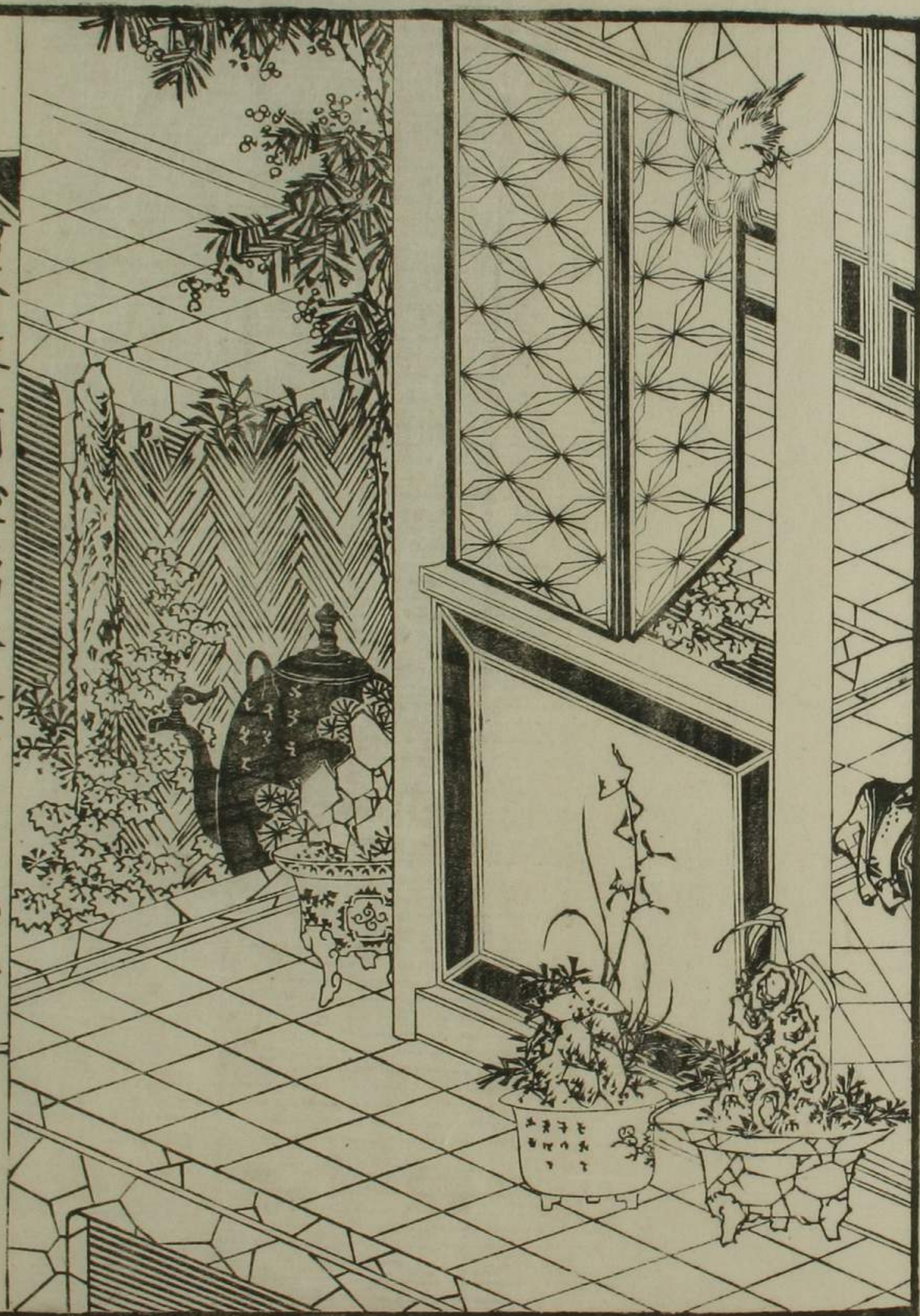
征西大都督太傅臣司馬懿。賊惶。戒心頓首。謹表。臣昔從
遼東還。先帝詔陛下。與秦王及臣等。升御床。把臣臂。深
以後事為念。臣言太祖高祖亦囑臣。以後事。此自陛下
所見。無所憂苦。方一有不如意。臣當死。以奉明詔。黃門
令董箕並才人侍疾等。皆所共知。今大將軍曹爽背
棄顧命。敗亂國典。內則僭擬。外專威權。破壞諸營。大

據禁兵。群官要職。皆置所親。殿中宿衛。歷世旧人。比皆
復斥出。欲置新人。以樹私計。根據盤結。互心日甚。外
既如此。以黃門張當為都監。專共交關。看察至尊。
伺候神器。離間二宮。傷害骨肉。天下洶洶。人懷危
懼。且陛下但為寄生。豈得久安。此非先帝詔陛下
及臣。升御座之本意也。臣雖朽邁。敢忘往言。昔趙
高極意秦氏。以滅呂霍。早斷漢祚。永世此乃陛下之
大鑒。臣受命之時也。太尉臣濟尚書臣孚等。皆以爽
為有無君之心。兄弟宜不典兵。宿衛奏永寧宮。皇
太后令勅臣表奏施行。臣輒勅主者及黃門令。嚴
獎義訓。吏兵以候就第。不得逗遛。以稽車駕。敢有

替留便以軍法從事臣輒力疾將兵屯于雒水浮橋伺察非常謹表上聞仰于聖聽

魏主曹芳表を聞く。乃ち曹爽をやりよせ仲達を奏をみ
不理の當然なり。汝いづ之を裁断せん。と云けり。曹爽色
を失ひ手足を張る。怖れ戦き。二人の弟を顧み。如何と云きと
問ふ。曹義が曰く。某あをと思ふ。已に再三諫めやせとも兄
迷を執て用ひぬ。今日果してその禍を引出せり。況仲達
が統の計へ。天ト及ぶもの。孔明ども勝るとはるを我等
兄弟いづして彼を敵せん。不如自縛して一命を助る。浩
る。泰軍辛敬司馬魯芝二人あへて。馳来り。曹爽
城中の様を問ふ。二人答て曰く。城中の密き。鉄桶を足る

と仲達大軍を引く。自ら洛水の浮橋を陣とする。只將軍
の權重。勢ひ強て削る。為にあらず。沙汰仕りの。まづ
くあり。司農桓範馬を飛して来り。曹爽を見く。ける
事。已に變ぜり。將軍を命。天子と許昌。御幸あり。よ
らせ。諸方の勢を招き集。司馬懿を征伐。人遅と
へ。叶す。曹爽が曰く。我が妻子一族。尽く城内あり。之を
棄て。何へ行。桓範が曰く。將軍いとけ。兵書と
んで。世事の真偽。あり。や。今まで將軍の舎宅。金
銀と輝。たる。已に他人の手。より。再び富貴
と来。よ。安ん。且夫匹夫。も。質と。と。人
一人。我。活。と。望。んと。將軍。天子。を。さ



れいよみまを
令女耳鼻を
截て曹氏を
永統を

令女

新古今和歌集卷之十一

とさんで兵と天下を召べ難う命で用ひざらぬあらん然る
之とて交て死を求むるの地は到りぬへんうと云けれ曹
爽を以て決するに能はざる涙をなげけり。桓範又
けるへ將軍の別營ちうく関の南あり。洛陽の典臺。尽く
治めて城外あり。若令と下し招め速う来て役を
致さん。今太の不許昌まで。路の程は半宿をたぬ。
殊に許昌の城中へ。おびく兵糧あり。軍中を憂るもの。
兵糧をうりて。今太司馬の印。某が腰にあり。早く
許昌の城へ。指筆の人。遅きとれ。滅亡し及べん。曹爽が曰
く。汝はあぬ。喧し。い。い。と。あ。れ。我。よく。心。静。て。工。夫
と。あ。さん。時。侍。中。許。允。尚。書。令。陳。泰。二。人。き。たり。仲。達。い。ぬ

兵と兵と將軍の威勢をあらと盛ちうと削らんと為ち。別
又他のいふちういふ。今城中へ。回く。官を退きぬ。自無事
あらんと云け。曹爽黙然として。言は。忽ち校尉尹太
目鞭をあげて。来け。曹爽元来交深り。城中の様
を問ふ。答て曰く。仲達浴水をとりて。誓をせ。他の心さら
ち。只將軍の兵権を削らんと為ち。大尉蔣濟が。昏闇此
あり。速う。城中へ。回りて。暫く。官を退きぬ。曹爽げ。も
と。あ。る。体。ち。う。け。と。桓。範。が。曰。く。事。已。に。極。し。り。他。人。の
言を聞く。自滅を求め。是夜曹爽。心。さ。ら。に。決。せ。て
劍を抜く手。握り。大に嘆息して。涙をなげ。夜。已。に。明
けれども。兄弟三人。心。い。や。と。二。決。せ。ざ。り。桓。範。又。き。たり。と

將軍兄弟三人。一日一夜思案して、心ちんで決せざる。と催し
ければ曹爽、劍を地を抜けて曰く、我兵を起さるも能はず。又
世に出く官職の望も、只一命を全し、富家の老翁
とあり。一期と暮さるべし。足り。桓範を以て聞くと、嘆
き外に出くやける。父曹真、いさしも大將の才ありて、鬼
怪のくちりし。汝三人の兄弟、いさしも真の豚犢なり。何
ぞ料らん。今日曹氏の九族を滅ぶさんとて、痛哭して
休む。許允、陳泰、志まきり。曹爽を諫く。大將軍、總兵乃
印を仲達に渡し、人としをわければ、曹爽を以て解んとす。
主簿楊綜、いさしもの哭くやける。將軍の武官
て休く。その印を他人に渡し、必ず死す市に引出して斬

れ。人何とて桓範が言を用ひぬ。ぬ。曹爽大に怒て曰く。
仲達より詔くだ。汝より唇を開くことある。とて卒に印を
解く。渡しければ、今まで従ひ。諸軍勢も之を以て、全く
落去けり。そのうち曹爽、いさしもの散騎官僚と、城中に回り。
洛水の浮橋をいさしければ、司馬懿下知て下り。兄弟三人
を送り。その家へ回らう。餘は、全く禁獄せしむ。曹爽兄
弟、家へ回ると、相従ひの一人も、全く獨歩して、ぞ入る。桓
範を以て、浮橋の辺を通ける。司馬懿馬の上より鞭をあ
げ。桓太夫あはれ。此のどくちる。天子より、とて旧の職を復
け。人とは、ざりけり。桓範、いさしもの慙愧。とて跡を以て、
去りけり。司馬懿を以て、魏主を守護して、都へ回り。曹爽

兄弟之間。ちりあふ。に鎖をめて其門戸を閉。百姓八百人。命令。四方を守らせ。高樓を築く。家の内を望む。曹爽。とちひられ。心の内憂ひ悶。彈弓を引。て後園の内に。雀を。徒然。慰め居ける。或日。樓の上。ある百姓。大將軍を放し。東南へ行。むと唱。け。兄弟の事を。議する。曹芳。ける。是。は百姓。どもの。戯。と。何ぞ。去。とい。今。已。糧。尽。て。飢。臨。り。昏簡を。送。司馬太傅。此。を。の。助。と。い。曹爽。と。從。一。通。の。昏簡を。封。門。守。る。もの。持。せ。仲達。送。とい。ひ。け。乃。太傅の府中。行。司馬懿。と。て。開。見。その書。曰。く。

賤子曹爽。百拜奉書太傅尊前。切念其哀。惶恐。無狀。招禍。今受屠滅。前遣家人。迎糧。于。今未返。數日。乏糧。万望。寬弘。當。頻見。餉。以。繼。且。夕。司馬懿。と。て。乃。返書。と。調。米。と。持。せ。遣。し。ければ。曹爽。ひ。き。と。る。その書。曰。く。

得書。知。公。之。糧。其。懷。跋。踏。今致。米。二百石。并。肉。脯。鹽。豉。太。豆。相。送。幸。乞。笑。留。

曹爽。大。喜。司馬公。元來。我。と。害。する。の。心。と。い。て。少。も。疑。と。あり。けり。司馬懿。へ。黃門。張當。を。捕。拷問。を。承。め。我。一人。の。き。と。い。何。晏。鄧。賜。李。勝。畢。軌。丁。謐。五。人。と。あ。ひ。そ。う。曹爽。と。計。を。合。せ。天。と。篡。の。企。ち。と。白。状。

しければやがて五人の者どもて擄取。糾問するは皆いふ三
月の内天子と殺して國を篡の工なりと告る。司馬懿
をある長柄を入とて、盡く捕へ桓範、郭公、太后の詔と
と号し。推く南門を通りたる由番兵の大將司蕃きたり
て新けし司馬懿又桓範をも獄に下し。惡逆の餘類と
盡く尋出し。その中曹爽兄弟何晏以下のものども千
余人を市に出し。斬殺し。皆その三族を誅滅し。家財を
とぐく官庫に納め集置たる女とその家を送回とて爰に令
女といふものあり。乃ち曹爽が従弟の文叔が妻よりて夏
侯氏の女なり。寡とあり。子ありければ其父又
婿と扱んで嫁し。やんといふは令女その耳を截る誓とあり。

再び嫁さるべき道あり。とて。今まで曹爽が家より居り。
曹爽を以て三族を滅ぼされて後その父魏主を新へ曹氏の
縁を断ぐ。又他人に嫁し。やんといひければ令女又その鼻
を切る。またぐも。一家の人々もどろき人の浮世あること
と人へ輕き塵の弱き草に棲ぎ。汝あること耳鼻を切
て自ら苦むをあたとて殊に汝が夫の一門へこそ仲達もや
ろおされたり。今誰が為此のどくあると云ければ令女
涙を押へ。ける。我も仁者へ盛衰をのめて節を改
め義者へ存亡をのめて心で易む。曹氏されし金盛之
し時ども我再び他人に嫁し。誓言し。今その家の滅
亡を以て何ぞ心で易く嫁し。や此禽獸の行なり。と

命を棄るとも之を為さずと云ければ司馬懿の由と
へき世ありがたき貞女ありとて一人の子を令女が娘子
として曹氏の後とぞ為しけり太尉蔣濟ひそそ司
馬懿を告ぐ魯芝辛敞といふの二人は曰比曹爽を恩顧
のゆゑに刺門を切破りて城を出たり又楊綜へ再三曹
爽を諫めく總兵の印を渡さまじとてり此ゆゑに殘置
ば後日の禍をあたふらん尺く殺しめんと云ければ司
馬懿が曰く是をわのく其君の為に是をあたふ忠義の臣
あり何ぞも君に仕ふ此ゆゑの心とて持たけしと
てと原の官職を授けし辛敞大に嘆息し我若姐
の初めまたがむんべ必に大義を天下に失はんとしてやける

司馬懿をあたふ榜を出一く民を安んず曹爽をよそがけ者
も罪をけられ原の工く用ひぬ軍民を安んず上下を
とぐ安堵の思ひをあたふけり何晏鄧騭が非命に死
したるは果しく管輅が占ふ應ぜりその後魏主曹芳朝
を設けく司馬懿を丞相と封じ九錫を加けし二
人の子司馬師司馬昭も重く封爵をあたふ父子三人政
事を摂りて權柄肩を双る人なり

姜維大戦牛頭山

司馬懿をよそがけ曹爽の家を滅ぼしとてども夏侯玄を
伐雍州を守りて然もその親族あるべ万一骨肉の義を
あつた兵を起しとて攻上るともあらん然るとれは由り



李敵奮
死之
闘を

打破て
二日地
山中を
走る

き太事ちろと。おのれ士と。魏主の詔を下し。雍州一
使を遣し。征西將軍夏侯玄を維陽へや。上せける。夏
侯玄は。あち曹爽が外弟と。夏侯覇が為。姪と。
おのれ夏侯覇も。雍とありけ。おが司馬懿が夏侯玄を
よび上せたることを。大に。おれ我曹爽が親族なれば。
卒に。司馬懿を殺さる。不如先と。手勢三千余騎
を調。謀及を企け。鎮守雍の刺史郭淮と。
聞付。時と。おれ推よせ。汝は。大魏皇帝の親
族と。天子の恩を受あ。何れ。今謀及と。よ。
け。夏侯覇大音あげ。曰く。我祖父國家の為
大功と。建の基業を開くる。司馬懿匹夫。罪なき。

曹爽を殺し。その三族と平げ。却て父子三人みどり。
朝綱と手と握る。今又使とせ。我を都に召し。す。
おれ。篡逆の企あら。おの故。我義より。賊を
討。汝あ。寄来と。郭淮も。め。鎧と。て。蒐
け。夏侯覇も。力と。舞。て。相當。戦ひ。十合。あり。
して郭淮。叶。て。走ける。夏侯覇。勝。の。め。追。
くる。不。二。手の勢。の。と。喚。殺。到。夏侯覇。ど
ろ。ひ。て。お。と。え。れ。尚書令陳泰。二軍。を。引。後。と。む。
郭淮も。おれ。と。取。回。來。で。攻。けれ。夏侯覇
大に。討。と。さ。く。逃。の。び。と。き。様。あり。と。卒。
漢中へ行。蜀の後主。降。泰。と。姜維。と。聞。信。と。

せば人を遣して。魏のやうな事を聞かむる事実はあらけれ
ば夏侯覇と城中に入ると對面と夏侯覇再拜して涙を
流し事の様をありのやうに語れば姜維が曰く昔微
子周は仕る方代る名を傳へり。御辺の忠を尽さば
の不可あらうとあらうとて酒宴を設けり。今司馬懿父
子あらうと権をとりて魏を篡のんあり。又出て戦の用
意ありやと問ふ夏侯覇答てやける。老賊父子。そ
て家業を立たり。何ぞとて出て他國を攻るの志あら
ん。彼父子の此のどとやせども近ぶる。魏は名将二人
あり。共さるゝ年若し。後大將とありて兵を用ひを
蜀の爲に由り。き大事にていけん姜維が曰く。いふ人ぞ

名とまき。夏侯覇が曰く。二人は今秘書郎たり。潁川長社の人
にて鍾會字は士季。とある太傳鍾繇が子なり。司馬懿は
兵法を論じ。王佐の才なりといへり。二人は今掾吏たり。も
ある義陽の人なり。鄧艾字は士載といふものなり。司馬懿
奇才なりとて。常軍機を度る。その二人は後大將と成
て攻来らば。実は大なる患あらん。姜維あき笑ひて曰く。そ
うな。その小兒あんど道は足んやとて伴ふて成都に到
り。後主劉禪は奏し。くやける。司馬懿をうけて曹爽とあ
る。又夏侯覇とやうに殺さんといふ。此の二人は夏侯覇来り
て味方と降る。今司馬懿父子権を專へり。曹芳懦弱
國をで滅びんとし。臣漢中なありて。年久く兵糧乃

支用満足く人強く馬壮う。願くへ勅命を受く。師を出
さん。今辛丑夏侯霸降より。此で用ひて案内者く王の師
と領して孔明の志と継再び漢室と與とんと云けれ。尚
書令費禕やける。近比將琰董允相繼ぐ亡び朝廷い
ぬ官と欠まぶるく戦ひと休て時の至ると待る人姜維が曰く。
人の生涯世に居て一白駒の隙と過るごとく。左様は徒然
として月日を送らば中原の門の時より恢復せん。費禕が曰
く。孫子も知彼知己百戦百勝とく。我亦も孔明も。
よむ孔明も中原と復さるゝとあふ。何ん況んや我
ホとや志く國と保ち民と安ん。社稷と守りて外の望
とあふ。若一奉の事とあふ。とて後悔さとも。なよ

ぶまど姜維が曰く。我麾下に住居して深く羌胡のんて
志なり。今師を出して外好て羌胡むむとび内庶民を招き
あひあひ假令中國を恢復せむとも。麾下より西へ心易攻
とんと。そのとれ後主宣ひける。姜維がや。一理あふ。汝も
。師と出さば忠と尽して。銳氣と墜ととあふ。此に於て
姜維勅を受く朝とあふ。漢中に出く計を議し先
西羌の胡へ使と遣して。援の勢を求め大軍とひぐ。
西平関より出く雍及へ近付。魏山の下に二つの城を築
て特角の勢をく。川口は兵糧と出して孔明の旧き法と效
ふべし。云けれ。夏侯霸やける。山谷の路をあた。險阻
より進むとも。たぐ退くとれも易うら。緩ととく

兵を起し、時、秋八月、用意一齊に備りければ、姜維は蜀の大將勾安、李歆二人を、かの一万五千余騎と共に、蜀の東西に城を構へ、勾安は東を守らせ、李歆は西を守らしむ。魏の細作ある由を、やめていそぎ、雍の刺史郭淮は報に、ければ、郭淮を、おもむき、副將陳泰と相議し、雒陽へ急を告て、援の勢を求め、先、雍の勢を率ゐて、戦將數十人を、さへ、一、魏の城を攻め、勾安、李歆を、とて、城を出て、戦ひける。又、魏の勢、五万余騎、生手を入り、揉なり、蜀の勢、小勢にて、戦ひ、屈し、城中、まゝ、ひて、救を待、魏の勢、へ、勝る。乘て、二、所の城を、取廻し、兵を分て、漢中の路を、塞ぐ。その城、俄に、構たること、あれば、漢中の通路を、止せられて、兵糧、既

よと、ぢ、勾安、李歆、や、と、き、ん、ぞ、あ、り、け、郭淮、兵を、下知し、城を、攻、させ、み、が、り、その、辺の、地理、を、て、陳泰、ひ、り、て、や、ける、我、の、山の、体、を、と、る、水、少、う、る、人、然、と、れ、必、だ、外、に、出、て、水、を、汲、ん、今、も、一、水の、源、を、断、止、を、蜀の、勢、戦、ひ、と、て、滅、ぶ、陳泰、の、義、げ、み、と、兵、を、分、て、山の、尾、を、一、文字、に、あ、り、切、水の、源、を、止、め、け、る、案、の、と、く、城、中、に、水、乏、し、と、諸、軍、渴、を、志、の、ふ、と、あ、る、を、城、中、右、て、へ、叶、よ、と、て、大將、李歆、外、に、出、て、水、を、汲、ん、と、り、な、て、魏の、勢、を、と、き、間、も、あ、り、取、巻、け、る、蜀の、勢、を、討、と、く、徒、に、引、回、る、勾安、も、城、中、に、水、あ、り、け、る、李歆、と、合、図、を、約、し、一、度、又、打、て、出、て、良、久、く、戦、へ、ど、も、又

打負く城に入る此より。日又隨く城中は弱士卒
みち枯渴しけり。安んずける。今姜都督の勢はど
来らん。如何なる故を。若又二三日も延ば是城
との。落へらん。李歆が曰く。我命をまて。固を出行の後
攻の勢を催さる。その間。いふも。と。怖る人として。自ら
叔十騎を引く。打く。生前。敵と追ひ。その勢は
まぎれて走らん。と。魏の勢は。彼を。取。ま。さ。る。と。
手下の勢。尽く。討。ま。る。と。李歆。一騎奮死。斬。抜。
痛手を負く。走りけり。此。夜。北風吹く。陰雲四方。掩。
蔽。み。び。び。雪。降。け。れ。城。中。の。もの。も。雪。と。り。て。
兵糧と炊ぐ。李歆。一騎。二日。間。山。路。と。ま。て。姜維

が勢は。土。あ。ひ。翹。山。二。つ。石。の。城。久。く。大。勢。固。漢。中
の。路。と。塞。れ。兵。糧。通。ぜ。水。の。源。と。め。ら。れ。て。城。中。皆。
渴。苦。む。幸。大。雪。ふ。り。な。る。と。今。一。兩。日。へ。怖。れ。ん。
事。已。急。ち。り。と。告。げ。し。姜維。曰。く。我。と。ま。と。救。
んと。の。内。へ。急。ど。も。羌。の。勢。上。る。と。待。間。鬼。角。延。
引。せ。り。と。李歆。漢。中。へ。送。り。と。瘡。と。治。せ。夏。侯
覇。と。議。し。と。や。け。る。今。西。羌。の。勢。待。ど。も。上。ら。敵。す。
で。翹。山。と。固。ん。で。事。と。あ。い。急。ち。り。御。辺。い。ち。る。計。
う。の。夏。侯。覇。が。曰。く。羌。の。勢。と。待。ば。翹。山。の。城。あ。ら。
破。れ。ん。我。と。ま。る。と。雍。州。の。勢。數。々。尽。り。と。翹。山。向。
志。と。り。雍。州。あ。ら。ん。空。虚。あ。ら。ん。將。軍。い。ち。直。牛。

徐唐の陣
 魏の諸將
 江山の雪
 を忍て風
 影を爰
 とも



新編 三國志 卷之七

七



新編 三國志 卷之七

七

頭山とくざんに生いて雍州ようしゅうの後のちに攻せめ魏ぎの勢せい翹山きょうざんとててき
たり救すくへん其そのとれ前後ぜんごより攻せめ雍州ようしゅうをあら破やぶるべし。
姜維きやうゐ志こころくどし喜び自ら牛頭山ぎゅうとうざんのぞんで進しん發はつを
そのとれ魏ぎの大將たいしやう陳泰ちんたいへ李歆りしんが城しろに生いて走りたふと
文ふみく是定これさだく救すくへと求もとむる為ためあらんとく後攻のちせの勢せいや
蒐さうるし待まちふ。あて其その後のちもあくりく屹まことと心付こころづく郭淮くわくゐ
ふひのりて中なかつけるへ今蜀しやくの大勢たいせい後のちよりありあら此城このしろを救すく
へざるへ羌きやうの勢せいと待まち揃そろへん為ためたり。若も羌きやうの勢せいをあらば
必かならずく虚ふたのりて雍州ようしゅうを攻せめ。今李歆りしん固こを生いて走はしたる
へ救すくの勢せいと求もとむる為ためたり。姜維きやうゐその城しろの危あやうきと聞きこふる
らば牛頭山ぎゅうとうざんに生いて。我われ後のちとあそくす。將軍しやうぐんへ軍いんを引ひ

て。洮水たうすいを固こめ。敵てきの兵糧へいりやうとさきり。又某またへ勢せいを分くわく。
牛頭山ぎゅうとうざんを守まもるといひけむ。郭淮くわくゐげふも同じく。ふづ
く洮水たうすいに陣ちんをとり。去さむども姜維きやうゐが先陣せんちんの勢せい已やふ
牛頭山ぎゅうとうざんに近付ちかづけむ。忽然くつぜんとく一手ひとての勢せい路ろをさき
り。魏ぎの大將たいしやう陳泰ちんたい大音だいうあげく中なかつけるへ汝なんぢもか雍よう久きう
て。おそへんとさる。我われスく相待あひまつと。よづりけむ。姜維きやうゐ
維ゐきてもあを鎗やりを拈ひひて馬うまをす。二三合戦ごうせんひける
。陳泰ちんたいあへて逃走にそう。蜀しやくの勢せい勝かつふのりて追討おいうち攻せけれ
。魏ぎの勢せいとさく亡なびく。山の頂たかに陣ちんをとり。姜維きやうゐ牛頭山ぎゅうとうざん
山の山下さんかに屯とんし。日夜にちや戦いくさひを挑いどむ。之これも墓もく。其その勝かつ
負ふもあつ。夏なつ侯こう霸はやける。此このふへまづ。陣ちんを取と

べけども久しう雷がし。叔日戦く。雌雄決せられ敵
の計あらん不如引退ひて別良計をさす。是時、卓馬
きたりて、魏の大將郭淮、洮水を固く、兵糧の路を塞ぎ
ぬと告げし。姜維大に怒りて曰く、軍中、兵糧乏しくんべ
安んぞ生る事を得んとて、夏侯霸を命とり、兵をさ
ぞけさせ、自ら後陣を備へ、まがくと引退く。陳泰山の
上より之をえりて、五手に分て追蒐ける。姜維ひとり五
路の総口を固く、五手の敵を拒ぎけし。魏の勢、難
所より支らざる。進得ず。陳泰兵を下知りて、小高き山
より上り、大石を飛し、兩のふちをくみ、矢を放ちければ、姜
維は、善く引退き、洮水を渡らんとき、郭淮、

て造る山の陰より打く。生前後をささぎりて、餘さどと攻
ければ、姜維奮死して、困て出、大半討て、陽平関をさ
て走る。なにより、鼓の声、天地を動し、魏の勢、潮の湧
がごとく、死来り、真先なる大將、圓面大耳、方口、厚唇、
左の目の下より、大なる瘤あり。瘤の上より、黒毛生たり。是を、あ
ち、司馬懿が長男、司馬師と名けり。都より五万余騎、下
りければ、蜀の勢、よりぞくぞくと、態と、そのふり伏居
り。姜維、大に怒りて、孺子いふあれば、我、回る路を阻むぞと
罵り、鎗を拈ひて、撞く入る。司馬師、刀をまがて、馬を交
戦ひ、三合あらず、矢を盡して、逃走。姜維、あてて戦ひ
て、あへば、陽平関に入けし。司馬師、又取て、回り追さる。

門て入らんとせんとし、関を守り蜀の勢一度々撃つてつゑ
放ちければ其矢雨よりも志げく魏の勢あひてく射殺され
る人善く、その退く此等孔明の傳し連弩にて一張
十條の矢をうち鏃を毒をぬる。そのうち麴山の城もうち
て大將勾安も魏に降る。姜維討たたる兵をねる。二枚萬
人よあひけり。漢中へ回し氣をやしあひ。虚病しく志を
いせむ。

吳魏交兵戰徐塘

魏の嘉平三年秋八月、司馬懿も病に卧し、日よそひ
危くありければ二人の子で呼んでやける。我魏に仕る官
太傅も昇たれば人臣の位その望まへぬ。諸人よと野心

あり、疑へども我いぞ不義の事せん。我死し後も
汝兄弟よく忠と尽し君の事よ必だ不義の心を生
て我清名を汚しとあら。万一の刻を背きあへば大不孝
の子たるべきぞといふ。忽然と命終ぬ。司馬師、司
馬昭も發し、魏主を奏し、葬の礼ありけり。魏主
曹芳もあらず。司馬師と大將軍を封じ、政を攝りしめ
たり。司馬昭も驍騎上將軍として兄弟権を執り、父の時
超たり。吳の孫権は始太子孫登、徐夫人が腹より出来ける。赤
烏四年、早世ける。次男孫和を立て、太子と定む。その子
へ瑯琊王夫人が腹より出来たる金公主と睦む。卒に
言せり。とて廢られ。又第三の子孫亮、太子と

立あるへ潘夫人が産所とすのとに陸遜もて死して國
 中の政事もふ諸葛恪が計たり。諸葛恪は諸葛瑾の子
 天和元年八月朔日俄々大風吹く江水涌揚り平地水
 深く八尺吳主代々の陵墓種る木の松柏尽く根より抜
 て風吹く建業城の門外よりひ来り道の辺に倒れ立
 けと孫權大なる病を受く次の年四月に至
 り。孫權ありて諸葛恪と大傳封し呂岱を大司馬封し
 榻前より召し跡の事ども委しくひ置忽然として亡ぶ在
 位二十四年壽七十一歳とに蜀の延熙十五年あり是
 於く諸葛恪政事と摂りて孫亮と帝位を昇せ天下
 大赦を行く大興元年と改め乃ち堊を厚く祭りて孫

權と太皇帝と謚と此由傳く維陽へきたるけと司
 馬師魏主を奏しと吳を伐んとに尚書傳報。諫て曰く
 吳は寇とあてと六十余年君臣と一なりと吉凶あ
 ると俱々も殊々長江の險阻ありて先帝のとてと
 勝しとるも不如く疆を守りて時の変と窺はん司
 馬師が曰く天道の三十年二度変と安んず常々鼎乃
 てく双び存せん我吳を伐んとあつと久し今孫權已
 死く幼主孫亮懦弱あり此時の例て伐んとて征南
 將軍王昶と千万余騎と授けく南郡と攻めせ征東將
 軍胡遵と千万余騎と付く東吳に向へせ鎮南都督晏立
 儉と十萬の勢と付く武昌より攻め弟の司馬昭と大都

督として。諸方の勢を下知せしむ。此年の冬十月、司馬昭とて、吳の堺に到り。諸大將を集めて、しける。東吳郡の吳の第一として守るものあり。是より大なる堤を築く。左右より、その城を攻め、巢湖の要害より拒ぐんと。呉はよく心をつき、王昶と母丘儉といふ各二万余騎を引く。左右より別をく。陣をとり、我東吳を攻破るをえて、同兵を進よとく。胡遵、諸葛誕と先手と。浮梁を渡りて、東吳郡よりせ。堤の上より陣を取く。二つの城を攻たり。け、吳の太傅、諸葛恪の由と聞く。文武の大將を集く。議して曰く。司馬昭大都督とて、胡遵、浮梁を渡りて、東吳の堤を攻させ。王昶、軍南郡の界より、母丘儉、軍武昌より、蒐る。

諸將いさる。計り、ある。平北將軍、丁奉が曰く。我國第一の兵、東吳より。此より破る。南郡武昌も共、危うらん。今魏の勢、三方より寄るといふ。彼も定く。また東吳を攻んとて。今東吳の敵と追散し。勢は、このため進め。自餘の敵へ戦へ。退く。諸葛恪は、妙論を。とて、乃ち丁奉、舟手の勢、三千人へ授けて、江に送る。呂據、唐咨、劉纂、ものく。二万余騎を付く。向へ、只連珠砲を鳴と。合圖、二齊を攻蒐る。我より、大軍を引く。跡より、続んといひ、け、丁奉、令て受く。三十艘、小舟より、折節、北風烈く吹け、順風を便と。東吳より、推よ。打向魏の先陣、胡遵、諸葛誕、東吳を推よ。



呉の丁奉
敵將を
の戦を
奪て血
戦を



せく堤の上陣とり相嘉韓綜といふもの二人左
右の城を攻させけぬが左の城は呉の大將全曜右の城
は劉畧いづれも固く守りて元来要害なれば魏の勢
日夜攻けども未落さず城の内は守手目もある程
の大勢なれば只まびく守りて救て待魏の本陣は徐唐
といふものありけるが俄大雪降る寒氣甚しうりけれ
ば酒宴を設けて諸大將を會し江山の風景を愛して居
たるものも介候より告て曰く只今江の内は小舟三十余
艘をせ来りぬ胡遵を急と聞て自ら出で望見する岸は
なみ三十余艘の舟あり舟ども百余人のりたりければ冷
笑ひて内に入り諸葛誕は向てやりける今敵の舟来るとい

とも其勢三千人なれば是ホのものども何程の事を仕
出さんみあぐんと安く酒を飲めんと悠然として
居たりけぬ呉の大將丁奉は三十艘の舟と一文字は馳連
袂大夫の士功を立名を揚しその一戦はあけぬと力と
奮る敵味方の目とさよさせよと云ければ三千の精兵勇
躍り甲盔を脱棄し身を軽く戦鎗の長きで用ひ
みち短き刀を提げ牙を咬で合図を待魏の勢は急と
してさあ笑ひ唄るものも忽然として合図の鉄砲の音
いて躍上り呉の勢は尽く跡は志とがけ真地暗は魏の陣
は誼入短兵をうせ挫く其鋒あるものおけは魏の勢

大勢ありとてども、悚然とせんぐある大将韓綜へ
長き戟をとりて生ける丁奉、身を側く敵の戟を引
くむ、走菟の一刀は韓綜を斬倒し、桓嘉を討ててと
き間もあらず、丁奉が左の方より生、鎧をさすの穴突くと
さす、丁奉又その柄を握り、まづが程ひき合はるが桓嘉
鎧をさす、走りければ丁奉きう、追うけ左の肩より腰を
うけ、桓嘉と二の二斬り、落し、奔る鎧を拵ひて、猶大
勢の中へ突く、入三千の呉の勢、面もろく、四方八面を蒐
通り、中軍の大旗を破倒し、追立く、操なり、魏の勢
討るもの、叔志、我先と逃走、先手の大将胡遵
諸葛誕も馬を飛して逃ければ、乱立する多勢の癖と

て、いふ、浮梁を渡らんとして、上へ上へ推合、程、橋を
念く、踏落し、溺死するもの大半、及べり、況や馬物の
具を奔る、足の踏ふありけり、司馬昭も、東吳の先
陣破れたる、ゆて案、相違ひければ、右て、叶、まど、と、認
方の味方、収めて、都をさして、上りける。

